

「妻サライと女奴隷ハガル」

2020年12月18日

サライはアブラムに言った。「主は私に子どもを授けてくださいません。どうか私の女奴隷のところに入ってください。そうすれば私は彼女によって子どもを持つことができるかもしれません。」アブラムはサライの願いを聞き入れた(創世記 16 章 2 節) アブラムはサライに言った。「女奴隷はあなたの好きなようにするがよい。」サライは彼女につらく当たったので、彼女はサライの前から逃げて行った。(創世記 16 章 6 節) ハガルは、自分に語りかけた主の名を、「あなたはエル・ロイです」と呼んだ。(創世記 16 章 13 節)

神はアブラムに子どもを与え、その子孫を祝福すると再三約束された。しかし、妻サライには子どもが生まれなかった。彼女にはハガルというエジプト人の女奴隷がいた。彼女はアブラムに、「主は私に子どもを授けてくださいません。どうか私の女奴隷のところに入ってください。そうすれば私は彼女によって子どもを持つことができるかもしれません」と願った。当時、子どもが与えられない女性は奴隷に産ませ、その子を自分の子とすることがしばしばあった。アブラムはサライの願いを聞き入れた。彼は子どもが与えられるという神の言葉が信じられなくなったのである。第二夫人としてハガルを受け入れた。これは、神の意志に反することで、アブラムの家族に大きな悲劇をもたらす。サライの期待通り、ハガルは懐妊した。ところが、懐妊したハガルは女主人サライを見下すようになった。エジプトから連れて来られたハガルは奴隷として、屈従の生活を強いられていたが、子どもを懐妊し、産めないサライに勝ったと高慢になったのであろう。サライは、ハガルの高慢な態度に怒り心頭に発した。夫アブラムに、「あなたのせいで私はひどい目に遭いました。あなたに女奴隷を差し出したのはこの私です。彼女は身ごもったことが分かったと、私を見下すようになりました。主が私とあなたとの間を裁かれますように」と、自分が目論んだことをアブラムの責任にしている。サライは、女奴隷からの蔑みに耐えられなくなったのである。アブラムはサライの申し出に、「女奴隷はあなたの好きなようにするがよい」と答えている。彼も責任を取ろうとしていない。ハガルのお腹に宿した子はアブラムの子どもである。その子に対して、愛情や責任を全く感じていない。サライはハガルにつらく当たったので、ハガルはサライの前から逃げて行った。ハガルは悲しく、行き場のない逃亡をせざるを得なかった。逃亡中に荒れ野の泉のほとりで、消沈しているハガルに、主の使いが「サライの女奴隷ハガル。あなたはどこから来て、どこへ行こうとしているのか」と声をかけた。ハガルは、女主人サライの前から逃げていると答えると、主の使いは、「女主人のもとに戻り、そのもとでへりくだって仕えなさい」と言われた。身重の女がエジプトまでの逃避行はできない。また、女手ひとつで、子どもの養育は困難である。元の主人の所に帰ることを促す。そして、ハガルに生まれる子は男の子で、イシュマエルと名付けなさい。あなたの子孫を増やし、数えきれないほどにすると、大きな祝福を約束する。

「ハガルは、自分に語りかけた主の名を、『あなたはエル・ロイです』と呼んだ。」「エル・ロイ」は「私を顧みられる神」という意味で、ハガルは絶望の中で、神の顧みを経験したのである。ハガルはアブラムの家に戻り、男の子を産み、イシュマエルと名付けた。

ここには、サライの横暴、アブラムの不甲斐なさ、ハガルの反抗と奴隷の絶望が交錯している。人間が生み出す罪の現実の中で、なお、赦して、生きていけるように祝福を約束してくださる神の恵みを伝えていると聞くべきではないか。